

イーライズ・マイル・ハイ・クラブは、
由緒あるブルースのライブハウスだった。

ジョージ・カックル



そのライブハウスは正面にステージがあり、前には広々としたダンスフロア、壁際には安っぽいプラスチックのテーブルと椅子が並んでいた。右手には長いバー・カウンターとビリヤード台のある別室。バー・カウンターの奥には、絶品の南部風フライドチキンを提供するキッチン。バー・カウンターの配置上、ステージが見えるのは端の数席だけだったが、カウンターの客たちはまったく気にしていなかった。なにしろ、ブルースは「見る」ものではなく「聴く」ものだから。

イーライズはカリフォルニア州オークランドの薄暗い通りにあり、最寄りのバス停から数ブロック離れていたが、それでも店内はブルースの夜を楽しみに来たアフリカ系アメリカ人の地元客で常に賑わっていた。

僕はその雰囲気と、週六日演奏される生のブルースに惹かれて通っていた。若い白人の自分にとつて、ブルースの文化と暮らしに触れる素晴らしい入門だった。もっとも、スタッフや他の常連たちと打ち解けるには何度も通う必要があった。トイレは仕切りにドアすらない典型的な薄汚れた空間だった。

ある夜、僕はタッド・バトラーと飲みながら話をしていた。彼はカウボーイハットにカウボーイブーツを履いたアフリカ系アメリカ人のブルースマンで、典型的なブラック・カウボーイだ（ハリウッド）。

ド・映画では描かれないが、実際に25%のカウボーイは黒人だった）。タッドとは長年の付き合いで、イーライズで最初にできた友人の一人だった。彼はいつも、ブルースや彼が出会ってきたブルースマンたちの話をしてくれた。彼自身の演奏も何度も見た。

その夜、僕たちはカウンターに座り、ある黒人ブルースマンがギターでブルースを演奏しているのを見ていた。彼の名前はクラレンス・シムズ。刑務所に服役していたことで知られ、最近釈放されたばかりだった。あるインディーズレーベルが、「刑務所帰りだから本物だろう」と思い込んで売り出そうとしていた。何曲か聴いたあと、タッドはうんざりしたようになため息をついて僕に言った。

「なあ、このブラザーより上手くブルースを歌う日本人のヤツを俺は知ってるぜ！」

誰のことかすぐに分かった。僕の友人、京都出身のタケゾウのことだ。彼は本場のオークランドでブルースを歌うためにアメリカに渡った男だった。それをタッドが認めているのが誇らしかった。月曜日になると、年老いて病気がちなブルースマンが演奏していた。名前はミシシッピ・ジョニー・ウォーターズ。声は掠れ、ギターもたまに音が外れる。それでも毎週月曜日、彼は必ず出演していた。

数年後に知ったが、かつては地元で有名なブルースマンだったらしい。癌を患い、余命いくばくもない彼に、イーライズは演奏の場を与え続けていた。そんな店だったのだ。

ある晩、タッドはストレートのウイスキーをすすりながら、「ブリー・チャー」と呼ばれる隙間だらけの歯をしたバーテンダーと僕がビリヤードをしているのを黙つて見ていた。なぜ彼が「ブリー

チャーネ（牧師）と呼ばれているのかは、結局分からなかった。まだ開店前だったのか、照明はバー・カウンターとビリヤード台の上だけ。ステージ周辺は真っ暗で、常連客たちが飲みながらタバコを吸い、おしゃべりしていた。キッキンの物音とグラスの音が響いていた。

この手のバーのビリヤードには、いくつかの暗黙のルールがある。勝者はそのまま続けてプレイでき、挑戦したい人は台の端のクッションの下に25セント硬貨を置くだけ。順番が来たら、50セント入れてボールを出し、ラックを組んで、前の勝者がブレイクショットを打つ。その夜はまだ誰も挑戦者がいなかつたので、硬貨は一枚も置かれていなかつた。

僕は蓋に美しい象嵌細工が施された木箱に入った、特注の2ピースキューを持っていた。それでブリーチャーと対戦していたが、惜しくも負けてしまつた。彼はそのままカウンターの奥に戻り、そろそろ始まる営業の準備に取りかかつた。すると、タッドが声をかけてきた。「なあジョージ、一局どうだ？」僕は笑つたが少し驚いていた。彼がビリヤードをするのを見たことがなかつたからだ。「いいね、やろう！」と応えた。彼は硬貨を入れてラックを組んだ。僕がブレイクしようとしたとき、彼はそつと耳元で言った。「ちょっと賭けようぜ？」一瞬驚いたが、映画で見るような大金ではなかつた。「次の一杯な」。僕はそれを受け入れ、ブレイクショットを打つたが、一つも球が入らなかつた。次はタッドの番だ。彼は壁のラックに並んだ古いキューをいくつか試したが、どれも歪んでいたり先端が割れていた。

それでも彼は一本を選び、まるで魔法のように次々と球を入れていった。黒の8番ボールまで一度もミスなく沈めてしまつた。そのたびに、いたずらっぽい笑みをこちらに向けてきた。僕は特注の2ピースキューを持ったまま立ち尽くし、彼が戻した歪んだキューを見つめた。完全にやられた。彼はブリーチャーに向かって叫んだ。「おいブリーチャー、ストレートウイスキーもう一杯、ジョージのおごりでな！」ブリーチャーは僕を見て笑い、「ジョージ、あいつとビリヤードなんてやつちやダメだよ、バカだな。ハスラーって聞いたことないのか？」と言って大笑いした。タッドはウイスキーを持ち上げ、目を輝かせて僕に感謝するような顔をした。僕はキューをケースに戻し、タッドの隣に腰を下ろして、ブリーチャーに「同じのを頼む！」と注文した。「俺がビリヤードやるなんて思つてなかつたろ？」タッドが静かに聞いてきて、声を上げて笑つた。

僕はその後、あのキューを一度も使うことはなかつた。ケースを開けることなく、誰かに譲つた。悲しいことに、イーライズ・マイル・ハイ・クラブは今や流行のバーとなり、もうブルースは演奏されていない。

ジョージ・カックル ラジオ・パーソナリティ。一九五六年鎌倉生まれ。インターFMや湘南ピーチFMで自身の音楽番組を持つ。著書に『ジョージ・カックルのWELL WELL WELL』（スローでメロウな人生論）『ジョージ・カックルの鎌倉ガイド』など。雑誌『ザ・サーファーズ・ジャーナル日本版』のマネージング・ディレクターを務める。